

歌ことば「袖の湊」

末澤 明子

1 はじめに

『伊勢物語』に由来する歌ことばに「袖の湊」がある。ごく短い章段二十六段

むかし、をとこ、五条わたりなりける女をえ得ずなりにけることと、わびたりける、人の返りごとに、思ほえず袖にみなとのさわぐ哉もろこし舟の寄りし許に（新日本古典文学大系109頁）

から「袖の湊」という成語が生じた。「みなと」を「なみだ」とする異文もあるが、「みなと」を本来のものとしてよいだろう。^{注1}この歌は藤原有家、藤原定家、藤原家隆、藤原雅経の四人による撰歌で『新古今和歌集』に採られ（一五・一三五八）、歌ことばとしては『新古今』時代から見られるようになったものである。そのような歌ことば「袖の湊」が『新古今集』の同段理解、扱いとどのように重なるのかをまず確認し、現代の注釈のありように及びたい。歌ことばの性格を考えるためである。

「五条わたりなりける女」から二条后関連章段の歌と見えるこの歌を『新古今集』は題知らず、読み人知らずとしている。『伊勢物語』の「男」の歌を採る場合、多く在原業平の作とする『新古今集』が同歌を読み人知らずとしたのは、これを男の歌ではなく、「人」の歌と理解したからとひとまず考え得る。^(注2)但し、この理解は現代の二十六段の解釈とは異なる。「人の返り事」の「人」をどう解釈するか、「わびたりける、人の」でなく「わびたりける人の」と解するか否かにより揺れがあったが、現在では概ね「男」の嘆きに同情した「人」（友人、男性）から来た手紙への返事としての「男」の歌とする。近時、「人」を「五条わたりなりける女」その人とする解も出されている。^(注3)大きな「もろこし船」に喩えられるものとしては適うようであるが、『伊勢物語』は修飾なしの「人」という語をそのような使い方をしないのではないか。それ以外にも、「五条わたりなりける女をえ得ずなりにけることとわびたりける人」の嘆きに接し、「はしなくも男の記憶が呼び起こされたのである」として「男」の歌とする解がある。^(注4)ことばの続き具合としては無理がなさそうだが、本文が「人の、五条わたりなりける女をえ得ずなりにけることとわびたりけるに、返り事に」であればなお無理がない。「男」に続けて「男」以外を語るにしている二十六段の表現はいささか唐突である。『伊勢物語』、『新古今集』それぞれの注釈史を辿ればさまざまな解があるが、『新古今』時代を扱うので、後代の解釈は今問題としない。作歌事情を省略して題知らずとする例は他の章段にも例があり、^(注5)ここでは問題としない。何であれ、題知らず、読み人知らずとすることによって、『伊勢物語』では二条后関連と読める章段から一切を捨象した一首の歌として、この歌は『新古今集』に置かれている。しかし、この歌が『伊勢物語』の歌であることはなお知られていたのなら、歌ことば「袖の湊」によって表されたのは如何なる心象であつたのだろうか。

2 「袖の湊」を詠む和歌

「袖の湊」を詠み込む歌として、勅撰集、歌学書に関しては吉原栄徳『和歌の歌枕 地名辞典』（おうふう、二〇〇八）による整理がある。今、勅撰集及び鎌倉時代中期頃までの例を探すと以下がある。『新編国歌大観』によるが、表記は私に改め、また、『隆房集』の長文の詞書は省略した。

* 『新勅撰和歌集』

こぎかへる袖の湊の海人小舟さとのしるべを誰かおしへし（八五三・恋二・源家長）

* 『続後撰和歌集』

影なれて宿る月かな人しれず夜な夜なさわく袖の湊に（七三四・恋二・題しらず・式子内親王）

海人小舟寄るかたもなし涙河袖の湊は名のみさわげど（七三五・恋二・百首歌たてまつりし時、寄湊恋・西園寺実氏）

* 『続古今和歌集』

なく千鳥袖の湊をとひこかしもろこし船のよるの寢覚に（六〇五・冬・千五百番歌合に・藤原定家）

人しれぬ袖の湊のあだ波は名のみさわげど寄る船もなし（二〇九五・恋二・恋歌中に・藤原良平女）

* 『新後撰和歌集』

浪こゆる袖の湊のうき枕うきてぞひとり音はなかれける（二〇八五・恋四・題知らず・惟宗忠宗）

* 『続千載和歌集』

涙そふ袖の湊をたよりにて月もうきねの影やどしけり（七八一・羈旅・旅の歌の中に・津守国助）

思ひつつい はねばいとど心のみさわぐは袖の湊なりけり（二〇九一・恋一・百首歌奉りける時、寄湊恋・後深草院少将内侍）

知られじな袖の湊による波のうへにはさわぐ心ならねば（二〇九二・恋一・題知らず・中臣祐臣）

* 『新拾遺和歌集』

いかにせんもろこし舟のよる方もしらぬにさわぐ袖の湊を（一〇三一・恋二・文保百首奉りけるに・二条為定）

* 『新統古今和歌集』

恋ひわぶる袖の湊の浪枕いく夜うきねの数つもるらむ（一一三五・恋一・千五百番歌合に・藤原忠良）

* 『式子内親王集』

胸のせき袖のみなと成りにけり思ふ心はひとつなれども（八〇・恋）

影なれて宿る月かな人しれず夜な夜なさわぐ袖の湊に（三四一・雖入勅撰不見家集歌・題しらず）

* 『隆房集』

何とかは濡るる袂におどろかむ袖に湊のさわくなるよに（五〇）

* 『如願法師集』

さゆる夜をあかしかねては波こほる袖の湊に残る月かけ（六一・春日詠百首応製和冬）

* 『寂身法師集』

片敷きの袖の湊に近づきぬ涙の海の海人のつり舟（六一一・所所会歌等）

* 『後鳥羽院定家知家入道撰歌』

わたつうみと荒れにし床や片敷きの袖の湊は寄るらん（二〇二・知家大宮三位入道撰・恋）

* 『前長門守時朝入京打聞集』

涙おつる袖の湊のあまをぶね寄るべ知らねば身こそこがるれ（二三六・寄湊恋）

* 『資平集』

しきたへの袖の湊の浦風に寄る辺さだめ波の月かけ（一〇二・五十首歌・恋）

* 『沙弥蓮愉集』

しほ満てば袖の湊のかたをなみひるとき知らぬわが涙かな（五〇七・題をさぐり侍りしに、忍通書恋を）

* 『雅有集』

などやこの袖の湊に満つしほのひるときなく波のかくらん（七〇六・百首和歌・恋・寄湊恋）

* 『千五百番歌合』

なく千鳥袖の湊を飛び来かしもろこし船のよるのねざめを（九八〇番右・藤原定家・勝）

うとかりしもろこし舟も寄るばかり袖の湊をあらふ白波（一二五三番右・三宮・勝）

恋ひわぶる袖の湊のなみ枕いく夜うき寝の数つもるらん（一二九七番右・藤原忠良・持）

* 『宝治百首』

同じくはもろこし船も寄りななん知る人もなき袖のみなどに（二七五八寄湊恋・後嵯峨院）

海人小舟寄るかたもなし涙せく袖の湊は名のみさわげど（二七六〇・寄湊恋・藤原実氏）

浪さわぐ袖のみなどの風をいたみ恋ふるに寄らぬ舟もつれなし（二七六二寄湊恋・藤原家良）

片敷きの袖の湊のみをつくしつくしはてつる我が心かな（二七七七寄湊恋・藤原資季）

とし月に涙のつもるわが袖の湊や恋のとまりなるらむ（二七八五・寄湊恋・藤原行家）

ぬるる顔にやどる月だに涙河袖の湊のさわぐちぎりに（二七九三・寄湊恋・藤原俊成女）

知らせばや袖の湊の波にのみもろこし舟のこがれわたると(二七九七・湊寄恋・後鳥羽院下野)

寄湊恋の中には、これらの他に「袖のみなどがは(二七六七・藤原実雄)」、「袖の下なるみなど河」(二七七〇・藤原忠定)、「袖に波たつみなど河」(二七七六・藤原成実) 他、「袖」、「みなど」の両語を含む歌がある。

* 『夫木和歌抄』

日くるれば袖の湊をゆく螢さわぐ思ひのほどや見ゆらん(三二七八夏二・百首歌、湊蛩・藤原光俊)

まつらがた袖の湊にこぎ寄せよもろこし船の泊求めば(一一八九〇雑七・湊・そでのみなど・光明峰寺入道撰
政家百首、寄名所恋・藤原有家)

とこの海に流れておつる涙河袖の湊のさわぐ名もうし(一一八九一雑七・湊・そでのみなど・文応二年毎日一首中・藤原為家)

* 『十六夜日記』

わがためや浪も高師の浜ならん袖の湊の浪はやすまで

次節でこれらの例につき、注釈をも合せて考察する。

3 「袖の湊」―本歌取・引歌と注釈

以上の例をみると、言われるように『新古今』時代に多いのが看取できる。そして、「袖の湊」だけでなく、「もろこし船」或いは何らかの「舟」、「さわぐ」が含まれている歌が多い。『千五百番歌合』の判詞では「伊勢物語に、思ほえず……寄りしばかりに、といふをとりなせり(九百八十番)」とする他、他の二首についても『伊勢物語』

に基づくことを述べている。『伊勢物語』は十分意識されている。『夫木和歌抄』に採られた四首も『新古今』時代及びそれに続く時代の作である。

『隆房集』は、前歌四十九番歌「なげきつつ春は昔に変はらずと言ひけん人をよそにやは聞く」の詞書に「その夜ふくるほどに、あひ見知りたりし所にゆきて……五条わたりの西の対にても、かぎりあれば、これほどはあらじとおぼえて」と『伊勢物語』を踏まえ、その次の五十番歌に「またその所にゆきて」と始め、「泣きぬらしたる袖のつめたく顔にあたれば、さくらのうはぎは、花の色やかへりてしるからむと、思ひわづらふほどに」「ある人」が「思ほえず……」と言つて通り過ぎたのが「耳にとまりて」とするものである。題詠でなく、涙に濡れた自身の袖から「袖の湊」が呼び出されているが、古歌を口にする「ある人」を登場させ、『伊勢物語』を意識し過ぎるほど意識している。「伊勢物語」の男を気取り、その行動をなぞっている」ともされる^(注6)。御所本系本文であるが、この部分は『艶詞』も歌句に小異はあるものの、詞書内容は同様である。

『伊勢物語』との重なるの甚だしい『隆房集』をさておき、「もろこし船」「さわぐ」をも取り入れたことの意味を考えたい。「思ほえず」歌の二十六段はごく短く、かつ内容の把握しにくい章段であり、「袖の湊」は涙を表すにしてもかなりの誇張表現である。それが「さわぐ」のは「もろこし船」のような大船が来た時、大事が起こった時である。二十六段以降長らく和歌に詠まれることのなかった「袖の湊」は、それだけではやや意味が分かりにくい^(注7)ため、「もろこし船」「さわぐ」をも取り入れ、『伊勢物語』を想起させる必要があったのではないか。『新古今集』の「読み人知らず」としての理解に立つての作歌であってもである。無論、自歌を本歌の状況と重ねる必要はない。「袖の湊」はままならぬ恋の中で心を騒がせ涙あふれる袖である。各歌は、ままならぬ恋を題材にしての歌で、「袖の湊」の表す心象における大事の度合いは一定していない。時代が下るにつれ二語なしの歌が増える。「袖の湊」が歌ことばとして定着したのだといえるが、『伊勢物語』からは離れる。そのことは、現代の注釈にも関連する面

がある。

注釈に関連するとは、「袖の湊」と『伊勢物語』との関連を必ずしも指摘しないことである。右の作品で、例えば新しい注釈である『和歌文学大系』（明治書院）を見ると、『新勅撰和歌集』（二〇〇五、中川博夫）の家長歌について、「本歌」としては「あまのすむ里のしるべにあらなくにうらみむとのみ人のいふらむ」（古今・恋四・小町）、「よしさらばつらさはわれに習ひけり頼めて来ぬは誰か教へし（詞花・雑上・清少納言）を挙げる。確かにこの二首は本歌といえるが、「袖の湊」はどのように関係するだろうか。「袖の湊」の注では、同書は「筑前国博多の歌枕とも言いが、「おもほえず……」を基に、涙があふれて注ぐ袖を川が注ぐ湊に喩えた意か」と断定しない述べ方をしている。また、『続後撰和歌集』（二〇一七、佐藤恒雄）では式子内親王歌の注に「袖の湊」を「新古今時代以後の流行表現」とし、実氏歌については「おもほえず」を本歌とする。『式子内親王集』（二〇〇一、石川泰水・谷知子）の注は八〇番歌については参考歌、三四〇番歌については本歌とする。「もろこし船」「さわぐ」の有無がそれぞれ本歌とするか否かの差になっていよう。現代の注釈ではないが、この二語のない『千五百番歌合』忠良歌につき、判詞中に「袖のみなどの事、さきに申し侍りつれど」とある。「さき（先）」とは「なく千鳥」歌の判を指す。「さきに」と簡略なのは、重なる表現についての評をする必要がないからといえる。しかし、『伊勢物語』との関連は指摘する。指摘必要との判断があつたのであろう。現代の注釈とは異なる面も早くにはあつた。『十六夜日記』についていえば、『朝日古典全書』（石田吉貞校註、一九五一）は「『袖の湊』は筑前の国にあるが、ここはただ袖といふ程の意」とする（272頁）。『新日本古典文学大系』（福田秀一校注、一九九〇）も「袖の湊は、ここでは『袖』の意。涙を止める（泊める）のでいう」（190頁）、『新編日本古典全集』（岩佐美代子校注・訳、一九九四）も「袖に涙があふれるさまの比喩」とする（280頁）。いずれも歌ことばとの認識は示さない。

和歌は比較的判断しやすいかもしれない。散文中の引歌であれば、どうだろうか。『とはすがたり』にその例を

見ることができるとは「とはずがたり」卷四に「袖の湊」という表現が一例ある。伏見御所で後深草院と再会する場面である。

世を宇治川の川波も、袖の湊に寄る心地して(新日本古典文学大系206頁)

この「袖の湊」を如何に注するか。このことは別稿で触れているので、簡略に述べれば、比較的新しい注釈が『伊勢物語』を指摘するのである。再会したのだから、「五条わたりなりける女をえ得ずなりにける」とは状況が異なるが、心を騒がせ、涙したというのであろう。早くの注釈には式子内親王歌「影なれて」を挙げるものがある。引歌は原歌の表現からあまり多くを採らないが、「もろこし船」「さわぐ」もなく、「袖の湊」の一語だけである場合、引歌というよりは歌ことばを使用しているというべきかもしれない。しかし、『問はずがたり』は『伊勢物語』と重ねた表現を多く用い、『伊勢物語』を強く意識している。そして「袖の湊」という表現を遡れば間違いなく『伊勢物語』に行き着く。注釈はそのことの指摘である。引歌と歌ことばとの境界の見極めは容易ではない。引歌の範囲について種々の論がある所以である。引歌を如何に認定するか、注釈は何を指摘するか、これについても別稿で述べている。^(注)

4 歌枕「袖の湊」

「袖の湊」には、もう一つ歌枕という問題がある。

おなじき国、浦小畑といふ湊に、唐船の着きてあるよしを舟人のうちに語りければ、さらば見物せんとて、遙かに船を寄せ、しばしとどめて

われもまた浦づたひして漕ぎとめぬ唐船のよりし湊に（新編日本古典文学全集『中世日記紀行集』551頁）

との一節がある。「おなじき国」とは長門国で、唐船が実際に停泊していたことによる歌で、『新編全集』頭注（伊藤敬）は「おもほえず」歌を本歌とする。唐船が寄港出来る港は限られ、大陸に近い長門国はそれに適うが、ここには歌枕との意識は見えない。幽齋『伊勢物語闕疑抄』二十六段も特定の場所に結び付けてはいない。但し、『前長門守時朝入京田舎打聞集』から「袖の湊」を長門と結び付ける意識は『新古今』時代からあったことなるうか。木下長嘯子『九州の道の記』（天正二〇〇一五九二）になると、「袖の湊」が歌枕として意識されていたことが分かる。

それよりほど近き博多といふ所に、四、五日ありけるうちに、「袖の湊とことごとしくいはれたるはいづくぞ、尋ね見ばや」と申しければ、主心ある人にて導しけるに、主のいはく、「今こそ潮のさし来て水も少し侍れ。

常は無下にいふかひなく候ふものを」とぞ申しける。まことに唐土舟寄せつべき浦とも覚えす。（新編全集583頁）

ここでは「袖の湊」は特定の場所を指している。『新編全集』頭注（稲田利徳）は「博多港の古名。沖の浜の南側にあつたとされる。ここは『伊勢物語』二十六段と関連づける」とする。「おもほえず」の歌は元來が比喻であり、

特定の港を指すものではない。それがいつしか地名としての歌枕となった。右二書に先立つ宗祇『筑紫道記』(文明一二二―一四八〇)は、山口から大宰府・博多をめぐり、歌枕を訪うているが、唐船を見かけることがなかったとしても、「袖の湊」に対する関心は見られない。他方、古歌への関心は強く、全編に見られる。三書とも訪れている染川・思川は、「昔、男、筑紫まで行きたりけるに」と始まる『伊勢物語』六十一段の「染川を渡らん人のいかでかは色になるてふことのなからむ」に伊勢の「思ひ川たえず流るる水の泡のうたかた人にあはで消えめや」(後撰・恋)が加えられたものである。『能因歌枕』に筑前の歌枕として染川はあるが、思川を含まない。が、平安後期の『五大集歌枕』(広本)では思川を加え、伊勢の歌を挙げている。撰者とされる藤原範兼(一一〇七―一一六五)の時代には歌枕と見なされるようになっていたことになる。川の名ではなかった思川が染川の異称として特定の川を指すようになったのと同様のことが「袖の湊」にもあったといえる。そして、思川は更に染川の近くの別の川を指すようになった。「袖の湊」の方は、歌枕としての意識は生じても、それほど強くない。博多辺に「袖の湊」と呼ばれる地名がかつてあったとされたが、その場所は近世期には不明となっていた。近代になって袖の湊として比定された場所も現在では否定されている。^(注9)

歌枕ではあるが、歌と共にあった歌枕ではなく、後になって歌から派生した歌枕である点が辞典類の記述の違いを生む。片桐洋一『歌枕歌ことば辞典』は初版(角川書店、一九八一)、増訂版(笠間書院、一九九九)とも「袖の湊」を立項しない。一方、久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店、一九九九)では立項され(三原由佳執筆)、「筑前の歌枕」と始め、和歌、散文での用例(『好色一代男』)につき解説し、地名「袖の湊」についても述べる。吉原前掲書は本来は地名でなかったことの留保をつけつつ立項する。『岩波古語辞典』は初版(一九七四)、補訂版(一九九〇)とも「袖の湊」を小見出し項目とし、『伊勢物語』『新古今集』を挙げるが、歌枕には言及しない。和歌の注釈での本歌・参考歌、『とはすがたり』の注釈とも通ずる。

「袖の湊」は『伊勢物語』前に用例なく、誇張した表現である。元を辿れば『伊勢物語』に行き着く。そのことは動かし難いだろう。既にいわれていることの確認になるが、この表現を蘇らせたのが『新古今』時代であった。前掲青柳論文によれば「袖に湊」を「袖の湊」と変えたのは式子内親王歌に始まる。『伊勢物語』でよく知られながら、和歌の世界では殆ど詠まれない景物を一時ではあるが、『新古今』時代に集中して同じ発想で詠まれたものに八橋のかきつばたがある。

たび人を絶えずみかはの八橋の蜘蛛手隔つるかきつばたかな（慈円『拾玉集』一〇二〇、一・宇治山百首・春・杜若）

関路越え都こひしき八橋にいとど隔つるかきつばたかな（藤原定家『拾遺愚草』四一七、上・奉和無動寺法印早率露膽百首・春）

から衣きつつなれにし跡ふりてけふぞみかはの沼の八橋（『後鳥羽院御集』一二八四、元久元年一二月賀茂下社三十首御会・雑）

集中してとはいえ、わずか三首であるが、それぞれ『伊勢物語』の内容を取り込み、慈円と定家はかきつばたが垣となつて都との距離を隔てるという新しい発想の歌となっている。後代の日記・紀行で八橋は強く意識され、かきつばたにも言及がある。しかし、和解史上、『伊勢物語』歌の直接的影響は少なく、かきつばたの歌も少ないことは片桐前掲書に指摘がある。『伊勢物語』九段の「からこころもきつつなれにし妻しあればはるる来ぬる旅をしぞ

思ふ」は歌句に八橋を含まず、本来は八橋と無関係の歌であったかもしれない。八橋とかきつばたの結び付きは強くない。^(註11) そのことが九段の歌自体は技巧を凝らしつつ情を十分伝えているにもかかわらず、八橋のかきつばたが和歌として詠まれなかった理由となつているかもしれない。「袖の湊」も『新古今』時代、『新古今集』が蘇らせた。なぜ『新古今集』なのかはまた考えるべき問題であろう。

注

- 1 竹岡正夫『伊勢物語全評釈』^{古注釈} 十一種集成(石文書院、一九八七)、片桐洋一『伊勢物語全読解』(和泉書院、二〇一三)。
- 2 『新古今集』撰者たちは、業平作であると承知しながら、敢えて読み人知らずとしたとする説として青柳恵介「袖の湊―新古今に於ける一つの撰歌意識」(『成城文藝』89、24―37頁、一九七九・七)がある。同歌に始まる巻二五の読み人知らず歌群十六首には『伊勢物語』、『大和物語』に伝える歌が九首あり、『伊勢物語』の「男」の歌を他に三首(一三六一・二一段、一三六五・八六段、一三六七・一二二段)を含む。一三六五は『雅平本業平集』、『在中将集』にも採られている。歌歌の背景には恋物語の世界が感じとれよう、撰者たちはそれを再構成して一六首が連続した恋物語を形成するよう配列、解に問題のある「おもほえず」を別にしても、連続した物語に業平の名は邪魔になるので、すべて読み人知らずとしたと考えられるというものである。但し、一三六一は『古今集』読み人知らず歌の改作若しくは異伝と考えられる。一三六五も男ではなく、女の歌とする解があり、撰者たちも同様に考えたとみる余地はある。更に一三六七も「袖中抄」が「きはめて不定の推量にてはあれど」(『日本歌学大系』別巻二二〇頁)としながらも、言いさしの形で終わって歌を含め「大和物語」一六九段との関連を指摘、古注にも指摘があり、『伊勢』も「大和」も古歌の物語化であったかもしれない。三首とも「おもほえず」同様、問題を含む歌である。勅撰集が「読み人知らず」とする基準の問題も含め、撰者たちが業平作と認めながら読み人知らずとしたかは疑問が残る。
- 3 片桐洋一注「前掲書」。一条兼良「愚見抄」説に同じである。
- 4 石田穰二訳注角川文庫本補注124頁(一九七九)。同『伊勢物語注釈稿』(竹林舎、二〇〇四)も同様である。
- 5 例えば、二十三段の高官の女の歌が題知らずになった(二五・一三六九)。また、一二二番歌のように「千五百番歌合」との出典はそのまま、梅の歌であったと考えられるものを桜の歌群に配列している例もある。

6 久保田淳『新古今和歌集全注釈五』（角川学芸出版、二〇二二）37頁。

7 「『とはずがたり』と『伊勢物語』—歌物語の〈影響〉覚書—。『源氏物語』を中心とする論考をまとめた近刊小著所収。旧稿にその後の研究成果を取り入れ大幅に加筆している。

8 「引歌攷?—引歌論をめぐって—」注7前掲書所収。

9 佐伯弘次「まほろしの湊—袖の湊と大水道」（川添昭二編『よみがえる中世—東アジアの国際都市 博多』、平凡社、一九八八）はかつて博多にあったとされる貿易港「袖の湊」の虚構性を指摘、以下のように述べる。袖の湊は中世を通じて文芸作品にしか見えない。そして、近世前期になり博多絵図に現れること、幽斎や長嘯子が案内された場所と思われる博多東の「袖の湊」、貝原益軒『筑前国続風土記』宝永一—一七〇四）が述べ、以後踏襲される西側説、それを補強、大宰大弐となった平清盛が日宋貿易の拠点として修築したのが袖の湊であるとし、通説のようになる中山平次郎説（一九二七）を紹介する。その上で、比定された地域は近年の発掘調査から平安末期には既に陸化していたことがわかり、益軒・中山説は崩壊、袖の湊は鎌倉初期の歌人たちが『伊勢物語』の和歌を本歌として創作した歌枕的地名であった、とする。

10 注2。

11 鈴木日出男『伊勢物語評解』（筑摩書房、二〇二三）は「業平実作の二首には、歌枕への意識がない。もとより史実としては、業平の東下りなどは考えにくいのであるから、本来、これら二首は八橋や隅田川とは無縁なのであろう。にもかかわらず、『古今集』の段階ですでに、八橋や隅田川で詠まれたとする詞書が付けられているのは、早くもその段階で業平の東下りの話が、歌枕の意識をもとりこみながら虚構されたと考えるほかない。そこには、歌枕の規範性も作用している」としている（41頁）。